



## SICA 中米地域統合 8 か国

SICA – Sistema de Integración Centroamericana

# ワザップとグアザップ?? 中米地域統合に必要な「地域公共財」

米崎 紀夫

私は2015年4月より中米7カ国及びドミニカ共和国の計8か国政府で構成される、地域の経済・社会統合を目的とし設立された中米統合機構（SICA）の総本山ともいえるSICA事務総局に、国際協力機構（JICA）から地域協力アドバイザーとして派遣されており、同事務総局のあるサンサルバドルを拠点に8か国を巡業しつつ、様々な国々の人たちと仕事をしている。

この地域統合システムに勤務する職員は周辺支援要員を含めると3,000人を超えており、8か国から様々な国籍の職員で構成されており、職場は国際色豊かであると想像される方も多いと思うが、実際に勤務すると、これら8か国の職員の国籍を外見上では認識することは到底難しいので、どうも国際機関に勤務している感覚はあまりないのが実態である。

ラテンアメリカ人特有の人懐っこさ、コミュニケーションの温かさもあり、またこれまで数多くのラテンアメリカ地域で勤務、活動してきた私としては、大きな問題もなく職場に溶け込むことができた。職場において様々な国籍の人間と、共通言語であるスペイン語で会議や協議を行ってきているが、国境を越えた彼らのコミュニケーション、しかも共通言語で何不自由なくやれるの

は本当に日本人としてはうらやましい限りだ。

そんな多国籍のラテンアメリカ人が集う職場において、このシステム内部者の立場で派遣されている外国人はスペイン基金のコーディネーターと日本人の私のみであり、非スペイン語圏の職員は現在私のみである。スペイン語ネイティブの彼らの会話に対等に入り込むのは大変であり、彼らも日本人である私に遠慮することなく、標準スピードもしくはそれ以上で対話や協議を求めてくるし、こちらからの提案やプレゼンはもちろんすべてスペイン語であり、外国人だから、という甘えや遠慮などは禁物である。お陰で毎日がスペイン語のシャワーを浴びるヒアリングマラソンの日々であり、これまでの海外勤務での環境等とは全く異なり、自宅に帰ると気づかぬうちにくたくたになっている日々が当初は続いたものである。

このSICA地域統合システムで仕事をする上で重要なポイントの一つが、「広範な人脈形成」である。SICAシステム関係職員のみならず、SICAを構成するメンバー国政府の高官、職員とも常に容易にアクセスできる環境の整備と構築が不可欠である。特にSICAでの意思決定は、各セクターの大臣会合での承認合意のプロセスが必要な

で、私もJICA地域協力の窓口としてこうした会合に出席する機会が多く、各国政府の様々なセクター大臣、副大臣レベルの方々との人脈ができた。中米地域は特に中規模以下の国々が多いため、当方が過去に勤務したブラジルやメキシコのような大国とは異なり、大臣級の方々とも比較的アクセスが容易なうえに、これらの大臣が少なくとも年に2回大臣会合開催時にその時の議長国に集結するので、こちらとしても一度に複数の高官と人脈形成が可能だ。

この地域においては、おそらく日本以上にSNSによるコミュニケーションが発達していて、日本で言うLINEに相当するのがWHATSAPPである。日本ではあまり使われていないようであるが、まずどのレベルの高官、職員であっても名刺交換を経て、ある程度信頼関係ができれば、携帯電話番号を交換し、これを自分の携帯電話に登録すれば、直ちに相手のWHATSAPPにつなげることができる。ここでは国境を越えたりリアルタイムのコミュニケーションツールとしてWHATSAPPは必須ツールであり、私の場合もプライベートのみならず仕事の多くの部分をこのSNSに依存している。メールでは言いにくいこと、事前の根回し、会議時間の変更なども含め、こちらの方々は会議中でも常に



コスタリカ国家生物多様性委員会の協議後メンバーと（撮影：筆者）

携帯をいじっているのは、まさに関係者との対話を行っているのだ。会議がつまらないので友達とチャットしているように日本人からは見えるかもしれないが、多くの場合は、仕事関係者との調整、会議中の参加者との裏意見交換、などだ。

さて私の勤務先は基本的にはサンサルバドルの事務総局のオフィスであるが、月30日のうち半分以上は域内のその他の国に業務出張している。業務出張というより、私のSICAにおける業務は、地域全体で発生するため必然的に場所を変えつつ業務の遂行が求められる。SICA地域は8か国で合計しても5,400万人、日本の面積の1.5倍という極めて狭隘な地域で、例えばエルサルバドルからグアテマラへの出張は、空路でわずか25分、ニカラグアは40分、ホンジュラスは45分、コスタリカは1時間15分、パナマは1時間半、ベリーズは50分であり、日本の営業マンの東京拠点に各都道府県への国内出張のような感覚である。なぜこれほど頻繁な出張が必要かといえば、SICAにおける開発協力プロジェクトを形成、実施するために様々なステークホルダーやアクターとの協議調整が必要であり、加盟各国政府関係

者との対話が必要なほか、SICAの各セクター専門技術事務局が様々な国に所在するので、これに加え、SICAは半年に一回議長国政府が交代するため、順繰りに議長国との調整も必要となってくる。やはりSNSやスカイプだけでは調整できないコミュニケーションは存在し、このように顔を合わせてきっちり対話しないと、SNSの効果も生きてはこない。食べ物は微妙に異なるが、フリホール豆、バナナ、コメ、鶏肉、トルティージャ、それに類似するものなど、大変似ているため、他国に出張してもあまり食生活に違和感もない。

ところで、地域統合の取り組みには、税関統合のような経済統合

や、医薬品共同購入、生態系コリドーの共通管理など、様々なテーマが存在するが、すべてのセクターで、SICAが現在最も取り組んでいるものの一つが、地域協力プロジェクト事業を実施した結果生み出される成果物の定義の設定である。つまり、地域統合の枠組みにおける地域協力とは、例えば二国間ベースで通常行われる開発協力とは異なり、各国ごとの開発ニーズを支援し、国内便益をもたらすのではなく、地域共通の合意課題やクロスボーダーイシューを解決する、すなわち一か国の取り組みだけでは解決できない課題に取り組むものであり、これにより生み出される成果品は「地域公共財」と呼ばれる。現在SICAにおいては、あらためて地域統合開発のプロセスに、これら地域公共財の創造が不可欠である点を強調してきており、私の派遣母体である国際協力機構（JICA）においても地域公共財の創造を基本としたSICAに対する各種地域協力プロジェクトが形成実施されているところだ。

地域公共財とは、簡単にイメージするために分類すると、制度政策、組織、情報、基準、付加価値、インフラストラクチャーなどが考えら



SIECA事務総長を交えてのJICA本部での協議（撮影：筆者）

れる。日本の協力で今後支援を想定しているものとしては、物流ロジスティックスのマスタープラン地域版の作成、インフラ強靱力の向上マニュアル、メソアメリカ生態系コリドーの管理、女性の経済的自立支援における女性活躍推進基準や認証制度、または越境地域の地域ブランド産品、競争力のある地域ブランド産品の確立、日本ブランドである一村一品運動や道の駅、5Sの考え方などの地域共通導入、国境地域の国際橋の建設、などであり、今後は国境税関施設のインフラ近代化、国境を越えた海洋沿岸資源管理、マルチデスティネーションの観光回廊開発などいろいろ考えられる。

SICAの地域統合システム内部で勤務すると、一か国で勤務する場合とは視点や見方が変わってくる。つまりA国の開発は、隣国B、Cの開発とどのような因果関係にあるか、国境の各種問題をどのように改善すべきか、エネルギーの需要供給関係は、地域全体として各国間でどのような相互依存補完関係になっているのか、商品や産品が類似するものが多いが、共倒れしないよう地域ブランド化が図れないか、サプライチェーンを地域レベルで持つことはできないか、貨物や人の輸送移動は、国境でもっと円滑に行えないのか、複数国で生態系を管理し、持続性のある天然資源管理と経済開発は行えないのか、などいろいろ課題が見えてくる。つまり、「木」ではなく、「森」全体が見えてくると、いかにもこの地域は日本の都道府県に思えるし、二国間ベースで各国独立して行われる様々なドナーの協力などを見るにつけ、全体最適、プログラムのかつ体系的開発アプローチの必要性も見えてくる。

こうした「木を見て森を見る視点」

で開発を考えるためには、とにかく域内をくまなく巡業することに加え、域内の様々なアクターとの人脈形成との継続的なコミュニケーションが必要である。そうした意味においては、SNSの発達が大変ありがたく、世界中の人々とリアルタイムにコミュニケーションはできる環境にあり、国境を越えたものとなっている。SICA地域においてはこのWHATSAPPが、実質的には政治家、民間セクター、学術セクター、家族友人間など、すべてのレベルでのコミュニケーションの地域共通標準ツールとなっており、いわばこれがまさに「地域公共財」と言える。

WHATSAPPはアメリカが起源のようであるが、この地域では面白いことにスペイン語を母国語とする多くの人たちが発音すると、カタカナ表記でいけば「ワサップ」もしくはこれが変音して「グアサップ」となる。私自身、着任当初に「これからあなたとはグアサップで話しましょうね」「あなたのワサップ教えて」と言われた際は何のことかよくわからなかったが、今では私の方から「グアサップ、ワサップ教えて」とあった人のほとんどにお願いし、人脈形成の糧としている。

これが度が過ぎると、最近では本当にグアサップのアプリが登場し、また、グアテマラの空港お土産屋にはなんとグアサップのTシャツまで売り出されている。これこそ地域ブランド化された地域の公共財、といえるのではないか。

それにしてもスペイン語という共通言語で8か国の人間が不自由なくコミュニケーションができ、グアサップ、ワサップでつながっている、というのは何ともうらやましい限りである。日本も隣国との付き合いは難しい面も多々あろうが、中米地域

に見習ってもう少しアジア地域で円滑に自由なコミュニケーションができるようになれば、様々な問題の解決の目処も立っていくような気がする。中米諸国の政府間で仲が悪く足の引っ張り合いをしている、などとよく中米を知る日本人関係者から耳にするが、この地域では、他の中南米地域と同様、仕事と友情は別であり、とにかく大臣レベルから一般市民に至るまで会えば意気投合し、仲良くなれるという、中米の文化、風土が私は大好きだ。地域統合は政治外交面の様々な要因が影響し、必ずしも十分進んでいない点も多いが、間違いなくここに住む人々の連帯意識は強く、ますます地域統合が推進することを願いたいし、期待している。私はSICAシステムにおける唯一の日本人アドバイザーとしてその一端を担っている立場にあることを本当に嬉しく誇りに思うこの頃である。



 **WASAP**

よねざきのりお（国際協力機構(JICA)）